Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

118

森　の　通　信　　2015. 9. 29

植林活動に参加するハラパン村の子どもたち(by FNPF Kalimantan)

CONTENTS

・People(37)アルビさん・・・・・・・・・p3
・オランウータンの生態と保全5・・・・・・・・p4～p6
・森林破壊 Zero（Zero Deforestation）を・・・・p7
・アルビ講演会・・・・・・p8～p9
・パーム油学習会第２弾・・・・・・・・p10
・エコツアー報告・・・・・・・・・・・・・・・p11～p17
・ミンダナオ子ども図書館・・・・・・・・・・・・・・p18
・世界の森林ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・p19

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
2015.9.29
118

ラマンドゥーの大火災

７月に中カリマンタンの FNPF 事務所に滞在している S さんから連絡が・・
「連日、ラマンドゥーで火事発生。狩猟目的の付け火と思われる。植樹林も燃焼。一時鎮火したと思われたが、再発。現在、燃焼防止に奔走。１ヶ月以上、雨なし、風向き悪し」

かつて三原和也君らがせっせと植えた木も燃えているとのこと！FNPF の Facebook ページでは、悲惨な火事の写真とともに、海からの強風が乾燥地の火事を燃え上がらせ、FNPF スタッフの懸命の消化作業にも関わらず、３０km 以上の土地が燃えたとありました。

８月のエコツアーでは、飛行機から地上をみると、至る所に火事が起きている煙が見られました。バスキに会った時、「２５０００本もの植えた苗が消失した。ちょうどジャワ島に里帰りしていた時で、乾季なのに不在にしていた自分の責任だ」と言っていました。しかし、２ヶ月半も雨が降っていないという事態は、乾季とはいえ異常なことです。

この後訪れたジャカルタのマングローブ植林地でも、２ヶ月雨が降っておらず乾燥が見られましたが、WETLANDs のニョマンさんによれば、この異常気象は気候変動によるものにちがいないとのことでした。合わせてアブラヤシ・プランテーションの開発による乾燥化が事態を悪化させているのでしょう。「大規模火災」に対しても、今後対策を強めていかなくてはなりません。

アメリカ西部の大火災など、今年の火災のニュースは世界的なものです。地球温暖化でついに地球が悲鳴を上げ始めた！？燃え盛る炎は、もう後のない人類への警告なのかもしれません（石崎）

【ウータン活動記録】

2015.6.9　ウータン会議
6.13　NGO スタディツアー合同説明会に参加
6.13　アルビさん講演会「インドネシアの森林破壊を問う！合法材を使おうよ！」
6.23　ウータン会議
7.1　龍谷大学政策学部「環境社会学」授業でワークショップ（石崎）
7.11　関西 NGO 協議会助成金最終選考プレゼンテーション（石崎）
7.12　パーム油学習会第２弾「インドネシアのある村でのできごと」
7.14　ウータン会議
7.19　エクアドル・インタグ SOS キャンペーン・シンポジウムに参加（西岡、石崎）
7.28　ウータン会議　加納さんを呼んで HP リニューアル談義 第１弾
8.1　インドネシア・バタン石炭火力問題の集会に参加（西岡、前川、石崎、近藤）
8.7　ウータン会議　加納さんを呼んで HP リニューアル談義 第２弾
8.18　ウータン会議
8.20-27　ウータン・ボルネオエコツアー２０１５（石崎、橋本他）

People37 アルビ・バレンティヌス氏

2007 年 10 月、クアラルンプール空港でバッタリ、国際線内で遭遇。アルビに「どないしたんや。あんたらも違法材調査やろ、カメラやコンピューターはどこ」と尋ねた。同時期、同地区マレーシアのポート・クラン周辺でお互いが違法材調査をしていたから。やっと笑顔を取り戻し、シンガポール空港で彼は言う。

「今回、悪徳警官たちと密輸業者が組んで、EIA と Telapak が泊まっているホテルに大量にやって来た。悪党たちが有無を言わさず、容疑無しで 2 人を勾留し、カメラ、コンピューター、金、パスポート全て略奪だ。パスポートを最後にくれただけ。」 無一文の彼にインドネシアまで帰国できる金を渡した。

2009 年 3 月、東京への招聘で彼は写真なしでプレゼンテーションをこなした。

その後彼は Telapak からオランウータン保護団体、フリーランスの活動家を経て現在、また違法材を追いかける FLEGT－インドネシアとして活躍する。

ところが昨年、突然名称不明の病で 4 か月ほど入院し、やっと元気になった。人間は突然、どんなことになるかもしれない。　　（文責・西岡）

連載「オランウータンの生態と保全」

（最終回です。久世さん、ありがとうございました！）

第 5 回　オランウータンの保全活動

久世濃子（国立科学博物館・人類研究部）

今回は、オランウータンの保全活動を、研究者の立場から紹介したいと思います。ウータンでは、ボルネオ島のサラワク州やカリマンタンでの保全活動が紹介されることが多いですが、私がオランウータンの調査をしているボルネオ島のサバ州なので、サバ州での活動を中心に取り上げます。

最も古くから行われているオランウータンの保全活動は、「リハビリテーション事業（野生復帰事業）」です。1960 年代前半に、サラワク州で始まり、1964 年にマレーシアのサバ州政府がサンダカン近郊にセピロク・オランウータン・リハビリテーションセンター（セピロク）を開設しました。その後、インドネシアのタンジュン・プティン国立公園やグヌン・ルーサー国立公園（スマトラ島北部）でも同様の事業が行われました。リハビリテーション事業では、違法に飼育されていたオランウータンのコドモを当局が押収し、専門のスタッフがオランウータンを育て、最終的には野生にかえす（人間の助けがなくても森の中で生きていける）ことを目標にしています。しかし、リハビリテーション事業は多くの問題を抱えています。例えば、森に放たれたリハビリ個体が、病気を伝搬し、食物を奪い合って野生個体群の生存を圧迫する、という批判や、1 頭のリハビリ個体を野生復帰させるまでには多額の費用がかかるので（150 万円以上）、その資金を野生個体群の生息地の保全に使うべきだ、という意見が根強くあります。

これらの批判を受け、1990 年代から、インドネシア国内では、いくつかの NGO がリハビリテーション事業の改良版「リイントロダクション（再導入）事業」を行っています。リイントロダクションでは、基本的に野生個体が生息していない森にリハビリ個体をリリースしていますが、リリースに適した森をみつけることは非常に困難です（森が残っている場所は密猟の可能性が高いことが多い）。その為 2000 年代に入ってからは、多くの施設で、オランウータンが檻の中で飼育されたままになっています。NPO 傘下の企業が生態系復元目的の森林利用権（コンセッション）をインドネシア政府から取得し、劣化した森林に植林してオランウータンの生息適地に変え、リハビリ個体をリリースしようという試みも行われています（http://www.bos-japan.jp/news/imgs/120502_repo.pdf）。しかし、リリース適地を探すのは困難を極めています。個人的には、密猟によって母親を失った孤児や人によって傷つけられた個体が存在する以上、彼らを受け入れる何らかの施設は必要で、闇雲にこれらの事業を批判することはできないと思っています。

近年では、オランウータンの保全と経済的利益の両立を目指して、エコツーリズムを活用しよう、という動きもあります。現在は、リハビリテーションセンターを

訪れるツアーが主流ですが、一部で野生個体を対象としたツアーも行われています。サバ州スカウ村では、1997 年からフランス人の研究者が地元住民とともに、オランウータンの調査研究と保全事業に取り組んでいます。保全活動の一環として、調査地でオランウータンを観察できるツアーも催行しています（レッド・エイプ・エンカウンター：http://www.redapeencounters.com/）。村外の資本を排除して、村人だけで旅行業の運営を行うことを目指していますが、安定して経営を続けるのが難しく、なかなか軌道に乗っていません（2015 年 8 月 25 日現在、2015 年のツアーは全てキャンセルされている）。

サバ州で行われているオランウータンの保全活動の一つに、「緑の回廊づくり」（http://www.borneotrust.org/）があります。サバ州キナバタンガン川流域には、小さな保護区や私有林が川沿いに点在しています。そこで保護区と保護区の間の土地を買い取り、野生動物が行き来きできる「緑の回廊」を作ろうというトラスト運動です。日本支部（BCT ジャパン：http://www.bctj.jp/）があり、日本人や日本企業、動物園等から寄付を集め、現地での土地の購入を支援しています。必ずしもオランウータンのみを対象とした事業ではありませんが、オランウータンの生息地の保全、という観点からは、こうしたトラスト活動は重要だと思います。

オランウータンを保全する為に最も重要なことは、生息地である熱帯雨林の保全です。低インパクト伐採など、注意深く管理された森林経営を行えば、オランウータンの保全と持続可能な林業の両立は可能だとする意見は、複数の研究者が提唱していますし、私自身も林業との両立は可能だろうと考えています。

図 1　移送事業で保護区に運ばれるオトナ雄

※サバ州では健康なワカモノやオトナが農園内などで保護されても、リハビリテーションセンターで飼育されることはなく、すぐに保護区にリリースされる

一方で森林が保全されたとしても、密猟が横行するようでは、オランウータンはその地域から絶滅してしまいます。森林資源の適正な利用とともに、法の遵守をどのように達成するのか、が重要な課題です。また、施設で「飼育」されている多くのリハビリ個体を森に返す為にも、劣化した生息地の修復とリリース後のモニタリングが必要ですが、これにかかる多額の費用を誰がどのように負担するのかは、難しい問題です。さらに現在、オランウータンの生存を脅かしている最大の脅威はオイルパーム農園の拡大ですが、この問題の解決はかなり難しいと思います。RSPO（持続可能なパーム油のための円卓会議）は設立されたものの、十分に機能しているとは言いがたい現状は、ウータンの会員のみなさんならご存知のことと思います。やはり日本を含め、多くの消費者の意識向上が何より重要だと思います。

さて、1年以上にわたって続けてきた連載ですが、今回で一旦終了させていただきます。また機会がありましたら、オランウータンに関する記事を執筆したいと思います。ご愛読いただき、ありがとうございました。

※今回の記事は「海外の森林と林業」No.89（2014）に掲載された筆者の論文を元に加筆・修正しました。

図 2　ダナムバレー保護区の野生オランウータン

※この保護区内は、人間にほとんど出会うことなく、天寿を全うするオランウータンもいるだろう

2030 年に森林破壊 Zero（Zero Deforestation）を

代表・西岡良夫

2014年９月ニューヨークで、温暖化防止に関する会議で、国連が「ニューヨーク宣言」をまとめた。内容は「2020年に森林破壊を半減させ、2030年に森林破壊を全て止めるという Zero Deforestation」（以下「宣言」と略）で、今までにない画期的な「宣言」だ。

既に CO2 が360PPM から昨年400PPM に増加し、昨年の気温が観測史上の異常さを示す。北極海の氷がどんどん溶け出し、このままでは2050年に気温上昇2度が限界を超える状況を呈していた。気温4度が上昇すれば、森林の6割が死滅・立枯れとなると科学者が指摘していた。

私たちウータンでもこの内容を確認していなかった。年末にウルグアイ政府が「Zero Deforestation」に賛同で2018年から実施すると分かる。1月 GCP（グローバル・キャノピー・プログラム）が最大の250社の森林破壊への加担大の企業を示し、国連も PR する。

ウータンで今年初めから論議を始めた。Zero 宣言は実行可能か、目標を大事にするかだ。ウータン総会で、「今後私たちも森林破壊 ZERO を目指そう」と。

林野庁が違法伐採対策を進めていないが、地方自治体が危惧し、3割弱が強い法案改正等を考えだした。6 月輸入材の細かな産地や伐採者、伐採方法などを書類で確認するよう義務付ける方向を自民、民主党等がやっととり出した（毎日新聞7・4）。

WWF インターは4月29日、森林減少が進む最前11 ヵ所のうち10か所が熱帯地域で、2010～2030年に 2 億 3000 万 ha も森林消失すると言う。

IUCN(国際自然保護連合)は、「商業的農業と林業の影響が大」と4月に報告をまとめた。新報告は、採鉱やインフラ開発業界で使われている革新的なアプローチを適用することで、商業的農業と林業がグローバルな生物多様性の喪失を軽減する可能性があることを明らかにした。IUCN の生物種の「レッドリスト」によると、絶滅危惧種への影響の数が、インフラ開発で 4688 種、採鉱部門が 1692 種なのに対し、農業 8482 種、林業は 7953 種にも影響が及ぶ。

また Global Forest Watch は4月２日、2013年の世界の森林減少を発表した。Global Forest Watch が Google と M 大学の協同で、作成データを新 Landsat8 の衛星画像と改善の解析方法で森林被覆の最新データを作成した。2013 年に 1800 万 ha の森林が失われた。2011～2013 年の間の減少34％がロシアとカナダの北方林の減少による。毎年約 680 万 ha が減少。森林減少率は世界的に高いままであるが、ブラジルとインドネシアは森林減少の速度が緩くなった。

世界最大のソブリン債があるノルウエー政府年金基金は4月22日、森林減少に本格的に取り組む。熱帯の森林減少に関与の企業の投資を回避する。森林破壊は責任ある企業活動として許されるものでないという警鐘だ。ガイドラインは企業に対し事業と気候変動リスクの関係の情報開示を求める。

また、企業の「森林を守る約束」の進捗監視する WEB「Supply Change」を Forest Trends が発表した。最近2年間で企業が「Zero Deforestation」を宣言しだした。だが政策を設定するものの内容は様々で、「宣言」通りに実施の保障はない。

Supply-Change.org では、企業の約束（プレッジ）と実施状況を比較し、随時公表する。ネスレ、ユニリーバ、バンジ、カーギル、花王などの大手企業も対象だ。ユニリーバはオランダに本社を置く巨大企業で、2020 年までに持続可能なクライテリアに沿う原料調達を 100％行うという約束と、2013 年で目標が約半分達成（自社評価）と。（SupplyChange は http://www.supply-change.org/）ここで［Zero Deforestation］自然林破壊のスピードを半分にし、2030 年までにゼロにするというターゲットの宣言を評価している。全体評価としては、1）サンプルとした 14 ヵ国での森林保全の目標を合計すると、2020 年までに年間でベルギーの面積と同じ程度の森林が保全できることになる。ただ世界の熱帯林減少の予測される面積の 30％にしかならない。2）2020 年までに「宣言」をこれら 14 ヵ国で達成できた場合は、2020 年までに二酸化炭素排出を年間で3ギガトン抑えることができる。これは年間のドイツとインドからの二酸化炭素の排出を合計したものと同等になる。

ウータンとして「宣言」実現へ「Good Campany キャンペーン」を始めようと、討議している。

日本の消費者は、「盗まれた木材」を使いつづけるのですか？

「インドネシアの森林破壊を問う！合法材を使おうよ！」アルビ講演会の報告　　米澤興治

本号の「People37」で紹介したアルビさんの講演会を６月１３日に京都のひとまち交流館でおこないました。アルビさんは主に何年もかけてつくり上げてきたインドネシアの木材認証システムについて説明をされ、このシステムを生かしていくためには、違法材を購入しないという消費国側の取り組みが必要であり、日本の消費者が実際に行動を起こすよう強く訴えられました。

当日の参加者は残念ながら少数でしたが、アルビさんに対する質問もたくさん出て、とても良い議論ができたと思います。以下でアルビさんの講演をまとめました。日本の消費者の一人として、私たちがよく考えていかなければならないことだと思います。なお、通訳は近藤美沙子さんですが、文章の責任は米澤にあります。

講演するアルビさん

森林減少が問題なのですけれども、森林減少にかかわる課題はものすごくたくさんあります。違法伐採自体も問題ですが、オランウータンなどの動植物の生息地の減少にもなりますし、人間と野生動物の摩擦にも関係します。人間対オランウータン、人間対ゾウであったり、いろいろな動物との摩擦が起こります。

貿易に関連する問題もあります。もともと、違法伐採に頼っていた工場は、今閉鎖しています。それは不公正な貿易なのでストップしました。私たちが安く手に入れている紙であったり、いろんな家具であったり、それはもしかしたら不公正な貿易から得ているのかもしれません。安い原因はもしかしたら、違法だからかもしれません。盗まれた木材であれば、税金もかかっていないですし、環境への配慮っていうことも全くしていないので、その分お金がかかっていないです。安い価格で提供しているということはインドネシアの経済にもダメージを及ぼします。環境配慮されてない伐採方法ですので、災害の原因にもなります。森林減少が原因となって、洪水、干ばつ、あるいは土砂崩れなどを引き起こします。森林がなくなると土壌が保湿できなくなりますので、その結果がそういう災害を引き起こします。

あとは私たちも含めた無責任な市場ですね、企業ももちろんそうですけれども、私たち消費者も責任をもたないといけません。情報の閉塞とか、不透明性とか、汚職に関する問題ももちろんあるんですけれども、マーケットが無責任であるということも、大きな原因だと考えられます。もちろんインドネシアの人口の 60%を占めるジャワ島でもインドネシアの木材は使われていますが、他の国に輸出されているものも多くあり、その中でも日本へ輸出されているのは２２％です。木材の直接の輸出としては２２％が日本なのですけれども、２７％の中国に行った木材も、その一部は日本へ中国を介して来ています。マレーシア側のサラワク州から、日本にたくさん木材が輸出されており、ボルネオ島における森林減少と日本が無関係ではないということがわかると思います。インドネシアでは違法伐採でとられた木材に対して警察が取締りを行っていますが、1999 年から 2000 年のはじめにかけて、違法伐採をしている業者たちがかしこくなり、木材を運ぶ時にあまり目につかないように、コンテナに入れたりとか、目につきにくいような状態するなど、取締りだけでは追いつかない状態です。

インドネシアの他の取り組みとしては、ティーラス、英語では Timber Legality Assurance System 木材調達検証システムというのも取り入れています。それのインドネシア語表記が

SVLK です。これは政治的、経済的、生態環境的、社会開発的をカバーした取り組みです。インドネシア国家としても合法的な木材の調達システムをつくろうとしているのですけれども、これは生産国だけの問題ではなくて消費国とも共同して取り組まないといけない課題です。これは、収穫の合法性、輸送、生産加工、貿易販売、この４つのステージですべてチェックがなされます。消費者のところに届くまでには、貿易の面で合法かどうかというだけではなくて、そのまえの３つのステップなどもきちんと把握しておく必要があります。

インドネシアにおける木材合法性のシステムがどのように機能しているかというと、企業者が実際に木材を伐採して、それをチェックしている検査機関もありますし、認証機関もありますし、CSO というのはNGO も関わっていますし、官庁で認可もとられるようになっています。

違法伐採をとめるのに効果的な方法というのは、消費者、消費国として違法伐採の木材が輸入されるのを防ぐことが必要です。インドネシアでは、NGO の人など、違法伐採された木材の証拠を身の危険を冒してまでもとっているのですけれども、日本では身の危険にさらすことなく変化をおこすことができます。違法伐採を止めることができたら、違法な動物のトラフィッキングもとめることができます。というのも、違法伐採にかかわっている人たちが、同時に違法な動物の取引にもかかわっているからです。

なにか製品を選ぶときに、皆さんには、これが、盗まれた木からできているのかどうか、というふうに立ち止まって考えて欲しいです。そのような選択を意識することによって、無責任な消費者であった日本の消費者から、意識のある消費者というふうに変わることができます。単に私たちが安いからという理由でこの紙を買ったとしても、その背景には、それによってたくさん問題が引き起こされていて、もちろん森林を破壊しているということもありますし、汚職を推進している、そして、動植物の違法なトラフィッキングにもかかわっていることになりますし、あるいは、人権問題、違法な木材の証拠を取っている人たちが違法につかまって人権侵害されることがありますし、最後に不正な貿易というのは、日本国内の合法な企業を傷つけることにもなります。

インドネシアでは合法な木材には、スライドで映しているようなロゴが付いています。これがあれば、ちゃんと合法な木材であるということを安心して購入できます。日本政府としてももちろん、このロゴが付いているものを輸入するということもできますけども、消費者としてもたとえばホームセンターに行って、紙であれ、なにか木材を使った製品であれ、このマークがついているものですか、と聞くことはできます。個人としても、そのように意識を高めることもできますし、個人が集まったグループとして、たとえばウータンのようなグループだとか NGO だとかそういうもので行政に問い合わせをしたり、企業に対してキャンペーンをしたりすることもできます。

インドネシアの合法の木材についているロゴ
（アルビさんのスライドより）

2003 年から始まった木材調達の検証システムの中でできた 2014 年の MOT 輸入規制により、インドネシアが木材を輸入する場合にも規制がかかるというふうになりました。インドネシアですら、自国が輸入するものに規制をかけているのですが、日本は木材を輸入する国として、どうしているのでしょうか。たとえば、EU やアメリカ、オーストラリアなど、アメリカではレーシー法がありますが、日本はどうでしょうか。

以上がアルビさんの講演の内容です。聞き取りやまとめ方の間違いがあるかもしれませんが、おおまかな内容はあっていると思います。この後、アルビさんは参加者からの質問に、とてもていねいに答えていただいたのですが、スペースがないので省略いたします。

パーム油学習会第２弾「インドネシアのある村でのできごと」

７月１２日にケイゾクエナジーでパーム油学習会第２弾「インドネシアのある村でのできごと」を開催しました。好評だった第１弾では、ボルネオ保全トラスト・ジャパンの中西さんにお越しいただき、パーム油の基礎知識や起こっている問題について広く意見交換を行いましたが、第２弾では、ウータンがこれまで関わってきたタンジュンハラパン村をケーススタディとして、ボルネオの現地の視点から、開発と環境を捉える機会を持ちました。

タンジュンハラパン村では、かつて近隣のアブラヤシプランテーションに反対するデモを行ったり、FNPF の支援により村人の中で苗作りグループを結成、一時は２０人ほどの組合として活発に活動を行ったりしてきましたが、２０１２年に主要メンバー７名がアブラヤシ企業に連れられてジャカルタへ行き、帰って来たらアブラヤシ開発賛成派になっていたというショッキングな事例をお話ししました。

タンジュンハラパン村の村人は多くが開発に賛成しているものの、他地域の事例にありがちな賛成派と反対派による村の分裂や企業との衝突という重たい話しというよりは、「どっちでもいいけど、親戚が賛成だからなんとなく賛成する」とか「新しくきた話だからとりあえずのってみよう」というさほど深刻に見えない雰囲気がある気がします（現実には「村の所有地を企業に売り渡した」といったとりあえずでは取り返しのつかない話が起こっているようですが・・）。

また、賛成の理由も一家に必要なバイクを買いたいとか、子どもを別のまちの高校や大学に進学させたいといった日本に住む私たちとも似通った理由が多く、今回のエコツアーでインタビューをした FNPF をやめたアルバインさんも、「（上の娘が大学に進学して）子どもの養育は親としての責任だ」と複雑な胸の内を明かしてくれました。

これまで村人の生の声を聞いたウータンメンバーの聞き取りの一部を会報誌から紹介しました。

「農園での作業のように定期的に仕事がある方が助かる。農園での仕事がいつまであるかは知らないけれど、これだけ広い土地だから、まだしばらくあるだろう。自分に仕事がなくなったり高齢で働けなったりする頃には、子ども達が働き始めて自分を養ってくれるだろう」

「（開発に反対して）自分が生まれ育った村で、みんなから嫌われることをどう思う？・・みんなは目先のお金しか見えていない。問題を理解しようと努めていないからだ」

「私が今回やっと強い実感とともに確信したのは、村の人は日本にいる私たちと同じということです。賛成派と反対派という当初の私の思い込みとは違い、あえて違いをあげるなら、こだわりが強い人とそうじゃない人であるということくらいでしょう。いい意味でも悪い意味でも人間同じという目線を持つことで、対等な協働のスタートラインに立てるのかなと思いを巡らしました」

学習会での意見交換では、オルタナティブな収入の可能性について議論が盛り上がり、「ツーリズムは大きくなっているが、村人に利益が落ちない。土産物を充実させるなどエコツーリズムグループで利益を分け合うしくみが必要だ」といった意見や、「今後は農薬で村の水が汚染されるといった起こりうる問題を村人に提示して、コミュニティ全体で考える機会を提供すべき」といった意見が聞かれました。

動物がいなくなることや地球温暖化が起こることの直接の不利益をどう伝えたらいいのかは、現地に限らず難しい問題です。火災や水害による直接の不利益、自然のめぐみがこれまで与えてくれていた利益、単一植物による病気や土への影響、アブラヤシの値段が下がり収入が激減するリスクを今のうちに皆で考えることや、５０年後に土地が砂漠のようになっているかもしれない将来世代のことも想定する必要があるでしょう。

これらは日本の都市に住む消費者でもある私たちの問題でもあります。懇親会も、はっしーによる鹿肉の差し入れ（日本では森に手が入らずに荒れてしまって鹿が増えすぎています）や神前先生の農地でとれた無農薬野菜を楽しみながら会話が盛り上がりました。

第３弾は、１１月２３日に樫田さんをお呼びして行う予定です。ぜひご参加下さい！（石崎）

2015 年 8 月ボルネオ・エコツアー～豊かな森の再生をめざして～　感想文

今年もウータン・ボルネオエコツアーを行いました！今回は現地で協力している NGO、FNPF の主要メンバーや 10 年来働いてきた元 FNPF のメンバーにもじっくりインタビューして貴重な映像が撮れました。森を守る活動への熱い思いと日本の仲間に対するメッセージ(仕事ではない友情）が聴けて胸が熱くなりました。僕もここで活動を続けている動機や意味を再確認した気がします。インタビューは編集して、みなさんとも共有したいと思います。

いっしー

１・ツネジー　こと　藤原恒夫さん

ウータンの会を知ったのは、6 月 13 日のアルビさんの講演でした。それから 7 月 12 日のパーム油勉強会を経て・・これは、もう現場を見に行かにゃならん。という事で、参加した次第であります。

ツアーのパンフレットを見て、シンプル。えらい大雑把でありますな。まあ出たとこ勝負や！何々!?　現地の村でホームステイとな。これはもうチョット詳しいこと聞かといかんな。電気は大丈夫?言葉は？アルコールは？　で、すべてアウト。

実は、私は睡眠時無呼吸症候群で医療機器と共に睡眠しております。勿論電気が必要です。言葉はテリマカシしか知りません。生き甲斐のひとつに晩酌があります。ハードル高いなあ。ただ、気持ちの方はすでに申し込みは済ませていたような気もします。取り敢えず、医療機器の方は医者に相談しなければ・・・先生曰く、２～３日だったらまあイイでしょう。　あのう、４～５日なんですが。

・・・もう自分で工夫するしかないか。Go! Go! Go!

初日、関空で集合。時間になっても同行の石崎さんが来ない。私は彼しか面識がない。周りにはメンバーらしき人がパラパラと。一人、ツアー会社の赤いタグをぶら下げていた。声かけてみよう。彼女が学生のマイちゃんであった。石崎さん電車が遅れているとのこと。ここからツアーは始まった。

飛行機を乗り継ぎ、ボルネオ、パンカランブン空港へ。着陸態勢に入ったところで、眼下を見渡すと地面から煙が数か所立ちのぼっている。山火事か焼畑か放火か？この時点からエコツアースタディ開始。

これから先が楽しみ。まずは小さな食堂でお昼。自分で皿にご飯を盛って、その上に様々なおかずをのっけてビュッフェスタイル？食材は何か分からないけど、美味い！すべてが美味い！ほとんどのものを受け付ける味覚と胃袋に感謝。食文化でスタディ。

現地スタッフに船着き場まで荷物を運んでもらうが、オートバイにどんだけ積むの？交通法規不要？異文化でスタディ。通りを歩いていると、小鳥の鳴き声が騒がしい。大きな倉庫の方から聞こえてくる。華人が多くの燕を飼っているとのこと。広東料理燕の巣だ。食の経済でスタディ。

ここから、観光ボート。セコニエール川を遡ってタンジュンハラパン村へ向かう。この景色が素晴らしい。流域に沿ってニッパヤシが生い茂るジャングル。私は、川と森が大好きで、この時点で

１００％満足！
　ただ・・・？　商業伐採拡散、違法？アブラヤシ、プランテーション、環境破壊。マイナス要因５０％。スタディ、スタディ。
　桟橋に着くと、村人と現地スタッフが出迎えてくれた。そこでステイ先の家族と引き合わされ、それぞれの家に向かう。私はどの人かな？あれっ、みんな行ってしまった。残ったのは、私とスタッフと近所の子供たち。まだお迎えが来てないみたい。ゆるー（笑）
　待つこと３分。少年がバイクに乗ってやってき来た。言葉は分からないけど、「後ろに乗って下さい。僕が送ります」と言っているような。OK！OK！　でもこの大きなスーツケースは？「抱えて乗って下さい」と、私は日本人なんだけど？？そんな曲芸みたいな二人乗り。無理、無理！

郷に従えかあ。しょうがないねえ。結構大きなスーツケース、両手で支えて、座席から尻がはみ出てるやんか。細い道をゆっくり走り出した。スピードがないと不安定。前から人が来る。バイクが来る。幅広のスーツケースは道の半分を占拠している。少年も緊張しているみたい。でこぼこ道、降り落とされそうになりながらステイ先に着いた。テリマカシ！テリマカシ！
　ここで、家族とご対面。鶏、アヒル、その子供たちも「コッコ、コッコ、グワッ、グワッ」と歓迎。メモをチラチラ見ながら、「ハジメマシテヨロシク、ワタシハ二ホンカラキマシタ、ナマエハツネオフジワラトモウシマス」
人間はみんな、緊張気味。ここで、関西のボケをかませたらなあ（笑）
なんとかしたい。で、緊張気味に、私は、鶏とアヒルに向かって「ハジメマシテ、ワタシハ二ホンカラ・・・・・・・」「アハハ、ワハハ」みんな笑ってくれたぞ！
　そんな、こんなで、ホームステイが始まりました。この日から！や？の連続。国際交流はこれだから面白い。最後に、エコにもちゃんと取り組みましたよ。

２．髙藤眞意さん（龍谷大学国際文化学部４年）

はじめに
　この７日間の旅では、非常に貴重な経験と多くの出会いに恵まれた。大きなバッグを背負い日本外のアジアへの旅をすることは初めてであり、見るもの聞くもの感じるもの全てが私にとって真新しいものであった。ジャカルタの空港を降りてすぐに感じた、生暖かい匂いと空気、時間の流れを妙に長く感じさせる何とも表現できない雰囲気。私が持ったインドネシアの第一印象は、ここからはじまった。そして、この 1 週間ここで様々な現実問題や大自然、人々と触れ合うことで、「グローバル化」が急速に進む世界で生きるとはどういうことなのかということを、改めて考えることができた。本稿では、このツアーへの参加目的から、学んだこと、感じたこと、今後の課題をまとめていく。
１、 ツアー参加の目的
　私たちの生活と直結している「パーム油」のことを知ったのは、2 年前に行われた開発教育セミナーでの「ウータン・森と生活を考える会」の石崎さんがファシリテーとするワークショップであった。私は、自分自身の生活と直結している「パーム油」が、その開発をめぐり森林破壊、環境破壊、また人々の生活に負荷をかけていることに大きなショックを受けた。そこから、自身の研究テ

ーマが「開発教育」であることからも、この問題について関心を寄せ、ゼミ活動や、母校(私立高等学校)でもワークショップをさせていただき、より多くの人達に我々自身の生活と直結している問題について考えてもらうべく活動してきた。しかし、ファシリテーターとしてワークショップをする際、現場で起こっている問題をリアルに表現し行うことへの難しさを感じていくようになった。「上手く伝わらない。」「何を伝えたいのかはっきりしない。」というようなもどかしさを抱え、どうしていけばいいか模索していく中で、「現場を自分の目で確かめてみよう」という結果に辿りつき、自分自身と繋がっている問題としてさらに落とし込めるように「現場を見たい」と強く思うようになったことが、今回ツアーに参加した大きなきっかけであり、「伝えること」の重要性を考察するという目的を持ち旅立った。

２、 7 日間の内容とそこで学んだこと

2-1, タンジュン・ハラパン村での生活と驚き

二日目の早朝よりホテルを出、ジャカルタ空港からパンカランブン空港へ向かった。中々飛行機が飛ばないのは、ここの生活柄だろうか、何でも定刻通りに動く生活をしている側からの一方的な考えからだろうか。そんなことを考えながら、空港へ降りると、現地の NGO,FNPF のメンバーが出迎えてくれた。そこから、さらにタクシーで港町まで出て、食堂で美味しい食事を頂き、クマイ港からボートに乗った。熱帯雨林に囲まれた川の上をボートでゆっくり進み 3 時間ほどすると、ようやくタンジュン・ハラパン村に辿りついた。村につくと、大勢の村の方々が、出迎えてくれた。その中でも、私をホームステイ先に選んでくれたのがアドランさん一家。一家は皆明るく、インドネシア語が全く話せない私にも何とかしてコミュニケーションを取ろうと私に接してきてくれた。

4 泊 5 日間タンジュン・ハラパン村でお世話になになったわけであるが、村での生活は、ホームステイでの体験も踏まえ、大変考えさせられるものが多かった。まず、トイレとシャワーに驚いた。私は、水が自動式に流れるトイレしか使ったことが無かったが故に、紙を使わずに排泄後どう処理をすればいいのか、水はどう流すのか、さっぱりわからなかった。初日はかなり困った。しかし、つべこべ言ってはいられない。なんとかしなければいけないし、皆のマネをすればいいだけである。バケツに溜まった水を如雨露のようなもので掬い、上手い事外の管を通るように流す、そして排泄後は左手でふき取る。なるほど、「綺麗にするとはこういうことか。」と感じた。

驚いたことはまだまだある。電気が、夜にしか通らない。しかも給電は、一定ではないから、よく電気が消える。また、考えれば当たり前の事であるが、こんなにも言語で困るとは思っていなかった。全く耳にしたことない言語が飛び交う中での生活は、「アイデンティティー」や言語の面白さを考えさせられた。この 1 週間で覚えたインドネシア語は、初日から私の所に駆け寄ってきてくれた村の子ども達から沢山学んだ。子ども達が言っていることを理解したい、コミュニケーションを取りたいという思いから言語は次第に身につく。さらに、実際に、手でご飯を食べるということは、初めて体験したわけであるが、あんなにもご飯を美味しく感じたのは、初めてであり、大変感動したことだった。

2-2, プランテーション開発と開発をめぐる構造問題

私たちが訪れたプランテーション開発現場は、セコニャール川岸から 1.75km 離れたエリアだった。私は、初めて「パーム油」の開発現場を直に見た。2,200ha の広大な土地に、何百本の油ヤシの木が列を作り育っており、道が四方に出来上がっている。油ヤシの木は、とっても固く太い幹でそれに手を触れたときの刺々しさには驚いた。油ヤシの実は綺麗なオレンジ色になったら収穫時期のようで、2 週間に 1 度その収穫する時が来る。世界では、パーム油の需要がどんどん増え続け、それに伴い、プランテーションは拡大していく。ここのエリアでも、プランテーションに必要な 3,000ha まで開拓できるように、さらなる拡大を目指しているようであった。しかし、土壌が豊かな土地を無理やり開発していくことにより、乾燥地は次第に増え続け、火事が増え、そこに住む動植物は自然と消滅する。動植物が消滅するだけではない。農業に、まで影響するわけであるから、

人の命にまで間接的にという表現が正しいか不確かであるが、必ず影響するのである。

また、パーム油開発をめぐる構造は非常に根深いことが分った。パーム油プランテーションで働くということは、安定職のようである。枯れた大地で農業をすることは非常に難しい。生活していく上では、パーム油事業に従事することが重要となるのである。しかし、森を守ろうと声を上げている人々が居ないわけではない。だから、反対と賛成に分かれ、村が分断されてしまうという現状もあるわけだ。私が、最もショックだったことは、油ヤシの木でいっぱいになる土地に、「以前ここに何があったのか」が不確かになり、プランテーション開発が始まる前のコミュニティーが壊され、村の人たちの居場所が崩されてしまったという現状だ。さらに、何とも腹立たしく言葉にならなかったのは、プランテーション開発を誘致するために、「プランテーションをすれば儲かる」や「電気が通っていないから不便でしょ、これどうぞ」とモノを持ってくることだ。まさに、トップダウン型の開発であり、人間の性を利用した「本当に大切なモノ」を完全に無視したやり方であることに愕然とした。そして、何より、恥ずかしくなったのは、このような現状を知らず、お茶の間でパーム油を使ったスナック菓子を食べている私たちの生活だ。知らないという罪は大きい。

誰を責めることもできないこの現状に、構造に息がつまったのは現場を見、色んな人々の思いに触れることが出来たからだろう。

2-3,農業と環境

「プランテーション」に頼らず、様々な作物を育て、農業を営んでいる人々に出会うことが出来た。土地が乾ききっていて中々農作物を育てることが難しい中、日本ではあまりみることができないキャッサバやジャックフルーツ等、植物の芽がしっかりと根について育っているところは非常に感動した。また、アグロフォレストリーという農法は、地道な努力からなるもので、森を再生するための大変貴重で尊重すべきものであった。私の知らない植物が沢山生っていて、森を歩くのが大変楽しかった。学ぶべきものは、まだまだ沢山あるのだ。

2-4, 教育

学校教育現場を見学させていただく機会に恵まれた。始めに、小学校や中学校への見学をさせていただいた。子ども達の元気に走り回る姿には、こちらも駆け回りたくなるような気分にさせられた。

NGO を立ち上げた方が、ファシリテートする、「森の大切さを子どもたちに伝え、共に考える」環境教育にも参加させていただいたが、そこで考えさせられたことは大いにあった。今回の環境教育は、森の中に植林をするというものであり、植林をする際にその苗の名前が書かれた立札とともに植える。立札に子ども達と共にオランウータンの絵を描き、作成したわけであるが、注意力散漫の子ども達にとって、何の詳しい説明もされないまま、森を守ることの意味等を子ども達に分かる言葉で話す間もなく、絵を描くことに集中することは難しいように思えた。これが、私が持ったこの環境教育の印象であった。さらに付け足すと、環境教育というものは、もっと身近な題材でもできるのではないかと、ゴミが地面に広がる風景を見て私は思った。私自身、たったの数日の滞在で、村のことは全くわからないし、村のリアルな現状も知っているわけではないので容易にいえることではないが、このような現状からしっかりと見つめ直していくことこそ森を守ることにも繋がってくるのではないだろうかと強く感じ考えたのである。

2-5, 経済成長と格差

最終日にジャカルタを訪れた。私は、都市部の超高層ビル、人々の多さ、外資系の企業の多さに

目がまった。目に見える村との格差に愕然とした。どちらが良くて悪いという気は全くないが、森林破壊の現状を見、経済成長まっしぐらの現状を見れば、何とも言葉にできなくなった。経済成長は、人々に何をもたらすのだろうか。私は、世界的に見ても稀な超物質的に豊かな家庭で生活をしてきた。水をドバドバ使い、電気をつけっぱなしで寝ることもできる生活だ。お腹がすけばコンビニエンスストアに行きおにぎりを 100 円で買えてしまう。それは、どんな成長の上でできる生活なのか。何を犠牲に私は立っているのか。金と経済成長に目がくらむと、見失うものが多くなるというのは本当だろう。私は、決して経済成長を悪とは全く思っていない。ただ、「大切なものは、本当に目に見えない。」ということを、心に刻みたいと強く思った。

３、 特に感動したこと

今回の旅で、「NGO」について考えさせられたことが多々あった。特に、日本国外で活躍する NGO の方々にも初めてお会いし、7 日間共に過ごすことにより、NGO の活動様子とそこで働く人々の思いに感動した。村を守ろうと日々活動する姿勢は、とても誇らしく尊敬に値するものである。

また、鶏の鳴き声で朝 4 時に目を覚ますことを初めて体験した。私たちは、卵を日々摂取するような毎日を過ごしているわけであるが、卵が産まれる瞬間を見たことがあるだろうか。多種多様な虫が飛び交い、花が咲く場所はこの世界にどれくらい残っているのか。私は、村で生活することにより、今まで気づかなかった感動に出会うことが出来た。人間として必要な智恵や感謝をしなければいけないことが山ほどあった。自然と共に生きるとは、自然に活かされ感謝をするということではないのだろうか。

最終日に、ジャワ島を訪れた際、ゴミが流れてあたり一面ゴミだらけの海を見た。唖然と立ちすくみ、座り込んでしまった。青い海のはずが、どす黒く映っている。私たちは、海からも多大なる恩恵を受けている。魚を摂取し、海は飲料水の源であり、私の命となる。それが、人間が出すゴミにより海を汚していく。汚していることさえ気づいていないであろう。頭の中も心もこんがらがってしまった瞬間だった。

４、 疑問に思ったこと

タンジュン・ハラパン村の中学校の社会科のクラスを訪れた際、「途上国はエジプト・インドネシア・メキシコ、そして先進国は日本、イギリス、アメリカ」という説明を先生が生徒にしていた。これは、私にとってものすごく違和感だった。私が受けてきた教育では、私の生まれた国、日本は先進国の枠組みに分類されている。ここで教育を受ける子供たちは、自分の生まれ育っている国を途上国という枠組みに分類される。自分の国に対する「常識」は国が異なれば違うということを、少し稀な観点から伺えたような気がした。しかし、途上国や先進国という概念は一体何なのか。大きなビルが立ち並び、経済成長をしている首都ジャカルタにある学校では、果たしてこの村と同じようにインドネシアは途上国の分類に入っているのだろうか。私の頭の中が疑問の山でいっぱいになった。

おわりに ―グローバル化と私たち―

ボーダレス化していく社会を生きていく中で、私たちは、完全に大切なものを見失いつつある。人の移動も、お金の動きも、モノや情報の行き来も自由自在の世界が、これからも拡大化されていくのだろう。それにより、恩恵を受ける人はどのくらい存在するのだろうか。一方で、その恩恵はどんな犠牲の上にたち受けるものなのだろうか。問題の所在が見えにくくなるのがグローバル化の一面でもあるだろう。恩恵を受けている地域とそうでない地域の距離は非常に遠い。私の家からあの「油ヤシプランテー

ション」が開発されているところまで行くために、単純計算でも 24 時間以上もかけてようやく到着するようなところである。距離的には何キロメートル離れているのだろうか。遠すぎて、可視化できず、気づきもしない現実がある。しかし、完全に私たちは繋がっている。この旅で改めて思い知らされた、且つ現地で出逢った人々のおかげで私の問題として捉えなおすことが出来た。巨大な複雑な構造の中で生きるうえで、私たちは、思考しなければいけない。感じ取らなければいけない。発信し続けなければいけない。問題解決のために何をしなければいけないのか、小さなアクションを起こしていかなければならない。

グローバル化されればされるほど、人との繋がりは、増え「共生」の意味は問われ続ける。しかし、グローバル化されればされるほど、「共生」の意味を考えることが希薄化されていく。この旅で、森と共に生きること、人と共に生きること、動植物、自然と共に生きることを五感で感じることができた。「共生」とは、知り、感じ、共感するところから始まるのではないだろうか。その連鎖が、持続可能な社会を築いていくことに繋がると信じたい。

謝辞

石崎さんをはじめ、このツアーを共にした皆様、現地で通訳をしてくださった坂井さん、ウータン・森と生活を考える会に関わる皆様、FNPF の皆様をはじめ、現地で出逢うことのできた皆様に多くの感謝をいたします。有難うございました。以上に記したことは、全て私がこの旅で感じ考えたことです。この「出会い」を大切に、今後も皆さまと繋がりながら、日々生活していけたらと思います。貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

3 ·「干ばつに苦しむタンジュン・プティン」　神前進一さん

昨年に続きエコツアーに参加しタンジュン・プティン国立公園，タンジュン・ハラパン村を再訪した。昨年も 8 月下旬に現地を訪れた際，ジュルンブンのアグロフォレストリー・プロジェクトが干ばつで苦戦しているのを見たが，今年はエルニーニョ現象の影響も加わり，昨年以上の干ばつに見舞われていた。

村人は 2 か月半，あるいは 3 か月雨が降っていないという。パンカランブン空港での気象観測データがネット上で入手できるので調べてみた。高校の地理の教科書では赤道から南北 7 ～8 度の範囲は年中，熱帯間収束帯（ITCZ）の中にあるため，上昇気流でスコールが発生し，最乾燥月降水量が 60 ミリを上回りケッペンの区分で熱帯雨林気候（Af）になると教えている。パンカランブンは南緯 2.7 度にあり，1951～89 年の平均値で年降水量が 2862 ミリと文句なしの熱帯雨林気候であるが，南半球に位置するため，6～9 月は太陽の回帰に伴い熱帯間収束帯が北半球側に移動するので，降水量が 160～180 ミリとやや少なくなる（といっても大阪の 6 月，9 月の降水量にほぼ等しい雨が降るのだが)。だが今年の気象データでは，8 月の降水量はわずか 12 ミリ（1 ミリ以上の雨が降ったのは 2 日だけ)，7 月は 53.6 ミリ（同 5 日）と平年の 7～8 月の 20%ほどで，私たちがパンカランブンを後にしてから 9 月 7 日時点までも全く雨が降っておらず 10 月まで雨が降らないとの予測もある。昨年 9 月から今年 8 月まで 12 ヶ月の合計降水量は 1607 ミリで平年の 56%にすぎない。ただし 2012 年から 2014 年までの各年の降水量は 3500 ミリ，4150 ミリ，3880 ミリと平年を上回る降水が記録されており，年間を通してみると必ずしも降水量が減少傾向にあるとは言えない。し

かし 7〜9 月の 3 ヶ月の降水量を見ると，2004 年から 2014 年まで 11 年間の平均は 286 ミリで，1989 年まで 39 年間の平均の 56%と確実に減少傾向が認められる。このように，6〜9 月の乾燥がエルニーニョの影響が加わり，極端化していることは明らかで，ジャカルタでも今年 6 月以降の雨量がゼロミリで，ジャワ島各地で水田が干上がり，アブラヤシの収穫量が 3 割減少し，人工降雨が各地で試みられたなどの新聞記事を目にする。

毎日夕方にスコールがあるという熱帯雨林を育んできた水循環がこの 3 ヶ月ほど断ち切られたことは，タンジュン・プティンでもさまざまな影響を生んでいた。空港からクマイの港への道でも随所に焼畑の火がくすぶっていたが，人為的な原因と思われる森林火災がパダン・スンビランン北部で発生していた。FNPF のよるジュルンブンのモデル・プロジェクトでは，樹苗は毎日の水やりで生き延びており，また畑での有機栽培も昨年と比べ，堆肥の多投入で地力が著しく向上したように見え，野菜の株元への敷草マルチやシェード作物の活用など栽培管理技術の改善によりにより昨年以上の干ばつのなか，多くの野菜は元気に育っていた。パダン・スンビランでは西ジャワから移住政策で定住した農民が，昨年違法砂金採掘を辞めて農業での暮らしを再開し，コメや各種野菜を FNPF の支援のもとで上手に栽培しており，今後は農業収入を元手に少しずつアブラヤシの苗を買って植えて生活を安定させたいと語っていた。森が失われ，干ばつが常態化するなかで，どのように住民主体で持続的農業を再興するかは FNPF も大きな関心を寄せており，クマイの事務所では日本人ボランティア柳原さんの献身的努力で，現地に適した有機農業の圃場試験が進められている。乾燥地での緑化・農地化には福岡正信氏の提唱する粘土団子やマメ科の緑肥樹木栽培などが知られるが，外来植物の導入には生態系への影響を考え慎重を期さねばならない。

ただ，こうした干ばつに対処する技術が一般の村人の間に広まっているとは言えず，私が民泊させてもらった Ijah さん宅では，この時期は畑で何もできないので，軒下のプラスチックポットで育てているトウガラシ以外，野菜はすべてクマイの町から毎日夕方にバイクで来る行商人から買っている。この家ではご主人と長男が BLP 社のアブラヤシプランテーションで働いていて，3 台のバイクを所有するなど，家財道具の揃い具合などから判断して，経済的に余裕があることも自給食料生産から全面撤退した大きな理由と思われる。家の前の川の水は洗濯に使われているが，最近は塩分濃度が上がって，畑の水やりに使うことができなくなったという。5 年余り前まで栽培していた水田も洪水を機に放棄されたが，これもプランテーション開発に伴う泥炭湿地の排水の結果，地下水位の低下が感潮域にあたるこの村の灌漑用水の塩分濃度を高めたことが一因となっている。現在，村の北側に広がる広大な水田跡には，何十頭かの牛が放牧されているだけであるが，何人かの地主はアブラヤシの苗を購入して植え始めている。BLP 社のアブラヤシ・プランテーションはこの干ばつで下草が枯れた状態であったが，かつての川跡で泥炭層の深い部分のみは下草が青々と生い茂っていたのが印象的で，農園開発以前の生態系の豊かさを彷彿とさせる。村を去る日の朝，家の裏手わずか 50 メートルほどの川岸に続く森でオランウータンを見た。残された川沿いの森が新たなアブラヤシ開発で失われ，オランウータンの住処が失われないことを祈り，住民の森を守り，森を回復する動きが加速するために，私たちは何ができるのだろうかを考えさせられた。

「ミンダナオ子ども図書館の設立経緯」

ミンダナオ子ども図書館：館長　日本文芸家協会会員　松居　友

海外ＮＧＯですら、容易に入れないと言われているミンダナオ北コタバト州に偶然足を踏み込んで知ったことだが、しばしば大洪水に襲われるイスラム地域のリグアサン湿原。ここでは、４０年にわたって政府軍と反政府軍の戦争が繰り返し起こり続けてきた。

２０００年の米軍を交えた演習という名の実戦。２００３年のブッシュ政権主導のテロリスト掃討作戦。このときには、１００万を超える避難民が出て、その悲惨さ、特に笑顔を失った子どもを見て、読み聞かせ、医療、スカラシップを基盤とした現地法人「ミンダナオ子ども図書館」を立ち上げた。

活動のなかで、イスラム地域の状況と並んで胸を痛めたのが、かつては自分たちの土地であった低地を、プランテーション開発によって奪われ、山岳地域に追われた先住民族の小屋を建てて集落を作り、靴も無く裸に近く、食べ物も一日２食のカサバ芋を掘ってたべ、おかずは良くて沢の蛙や蟹。しかも、原生林の中に住んでいるのならまだしも、地平線まで見渡す限り木のない広大な草地の隆起する谷間に集落がある。最初見たときは、その広大な風景に感動したが、かつてはそのすべてがラワンやマホガニーのジャングルであり、そのすべてが切り払われて、なんとほとんどが日本に輸出されたのだと知ったときはショックだった。１９７０年代あたりから、日本は自国の山林を保護する傍ら、ミンダナオなどの山林を破壊し、はげ山にしてきたのだった。しかも、それが原因でイスラム教徒が住んでいる下の湿原が毎年数回の大洪水に見舞われている。これを知って見るに堪えられず、植林を始めた。

ミンダナオ子ども図書館について　（mcl-japan.jimdo.com/）　井下祥子

ウータンの原点はフィリピンのハゲ山？無残なハゲ山が日本のせいと知り、ショックを受けた女性達がウータンを立ち上げたそうです。山は保水力をなくし、何十年後の現在も大洪水の被害をもたらしています。そんなフィリピンで活動する松井友（とも）さんと、ミンダナオ子ども図書館。教育支援、内戦の難民や洪水被害者の救援、危険な紛争地帯での平和活動など、幅広い活動はミンダナオ子ども図書館ホームページをぜひご覧ください。TVの「池上彰のJAPANプロジェクト」「なぜここに日本人」にも登場！

［サラワク州が厳しい森林法案？を導入］

マレーシア・サラワク州議会は、2015 年 4 月 22 日付で新森林法案を可決。法案は、違法伐採に対し重い罰則を導入し、執行の役人へ多くの権限を与える。ライセンスなしでの林産物の採集、条例の下で要求の情報の詐称、所有を保証するマークがない林産物の加工等の違反に厳しい罰則を科す。2014 年就任の首相はサラワク州で違法伐採の統制に努力すると約束。2015 年にサラワクにおける汚職や違法伐採を公に非難し、いくつかの取締りを開始した。新規ライセンスを全凍結し、関係機関を強化、関連する政府の条例見直しを約束。昨年より違法伐採で 4.1 万リンギットも失った。（資料 5/14Star,anpdm.com など）

［パーム油製造での森林破壊続くと WWF が警笛］

過去 10 年間で森林破壊は減少しているが、WWF は将来 100 万 ha を超える大規模な森林破壊が再び発生すると予想。4 月 28 日に「リビングフォレストレポート 2015」では、2010～30 年にカリマンタン、スマトラ、パプアの各島で 3500 万 ha も森林が急速な農業開発で失われると。（4・29WWF、Jakarta Post）

［ペプシコ等大企業が厳しいパーム油の基準を］

ウオルマート、ペプシ等はパーム油のサプライチェーンから森林減少をなくすために、主要な世界的企業と投資家が RSPO（持続可能なパーム油のための円卓会議）に強い基準の設定を求めるための依頼を提出。泥炭湿地保全等は RSPO で見直しがされていないと。RSPO 認証基準は「パーム油の供給チェーンにおける持続可能性の問題に対応できていない」と。
(6/1 Mongabay.com)

［中国の木材業界は 30 年で年間生産高は 40 倍］

就業人口は1000 万人を突破し、中国木材・木製品流通協会主催「2015 中国木材・木製品流通産業年次総会」が 5 月 17 日北京市内で開催。しかしミャンマー等から密輸続く（資料；フェアウッドニュース /ge_Report.pdf）

［温暖化防止会議、G7 サミット、気温上昇 2 度防ぐ］

6月にボンで開催された G7 サミットで 2030 年までの取組に気温上昇を 2 度が限界とパリ会議への骨子提案。また温暖化防止会議は「2020 年に森林破壊を半減、2030 年に森林破壊 Zero」目標の「ニューヨーク宣言」を再確認したが、2 度気温上昇すると、アマゾンは 2.4 度気温上昇し、大きな損害だと科学者が指摘後、7 月末「上昇 1.5 度が限界だ」と指摘の学者も。
(Google+Climate Change ブログより)

［アラスカ州、400 か所で森林火災が発生中］

米国アラスカ州の今年 5 月は 91 年間の間でも最も暑く、大半の雪を溶かした。森林火災が多発し、その後も増加。1 か月半燃え計で 400 か所森林火災が起きた。火災で永久凍土からの CO2 が大問題だ。インド等では激しい猛暑だ。（6・25ワシントンポスト等）

［WWF「ゼロ・ネット・ディフォレステーション」発行］
WWF UK と Climate Advisers が森林を保有している各国が発表している「ゼロ・ネット・ディフォレステーション」の宣言の検証したレポートを発行。（6・8WWF）

［違法伐採：自民が新法策定へ業者調査義務付け］

自民党林政小委員会は 7 月 3 日、海外で違法に伐採された木材が民間の輸入業者などに合法かどうかの調査を義務付ける新たな法案を策定する方針を決めた。8 月に法案をまとめ議員立法として年内の成立を目指す。違法伐採材はマレーシア、インドネシアなどを中心に違法伐採の木材が安い価格で輸出され問題化している。

違法材は環境破壊のほかテロ組織の資金源になっているとの指摘もあり、やっと動きが広がっている。林野庁によると、日本国内の木材総供給量のうち外国産は約 7 割。「外国産のうち違法伐採は約 1 割を占める」との民間推計がある。日本は 2006 年、政府に対しては公共事業などで輸入する木材の合法性の確認を義務付けたが、民間業者につき自主的な確認にとどめていた。欧米は民間業者も含めて確認を義務化している。（毎日新聞7・4）

ウータン・パーム油学習会第３弾

サラワクの先住民の声を聞け！
講師：樫田秀樹さん

◆日時：１１月２３日（月・祝）

午後１時より（予定）

◆場所：　ケイゾクエナジー（コープ野村梅田Ａ棟1310号室　大阪市北区鶴野町４）

◆参加費：１０００円

※詳しいことはメールなどでお問い合わせください。

地図中央上のＡのところがコープ野村梅田

（阪急梅田駅茶屋町口から徒歩７分）

樫田秀樹さんとは：

　１９９０年代からいち早くアブラヤシプランテーションの開発問題を取材され問題提起をされてきました。サラワクを何度も訪れて先住民との関わりも深いかたです。日本ではアブラヤシ開発の問題をもっともよく知っている人物と言っても過言ではありません。

＊「インタビュー動画（バスキさんなど FNPF からのメッセージ）お披露目会＋ウータンホームページオープニングの紹介」　　１０月３日（土）１８時より　ケイゾクエナジーにて

＊アースパレード２０１５ in 京都　１１月２９日（日）気候を守るパリへの行動（温暖化防止への世界同時行動です。）　午後１時　円山公園（京阪　祇園四条下車１５分）

※問い合わせは、石崎（issy@pure.ocn.ne.jp　090-8145-1146）

西岡（hutan.nishioka@docomo.ne.jp）まで